

# 余市の人々。 第5回 【江部拓弥】

## 戦略推進マネージャーの連載を広報誌で掲載しています！

店を畳む多くの町の本屋は「倒産」じゃないんだと、塩田さんは力を込める。「辞める」んだと。儲からない本屋をずっとやってきたんだから、引き際くらいは自分で決めたいもんねと、塩田さんはさらに力を込める。

「四代目の目処が立たないなら、うちも辞めることになるんでしょね。あと5年。70歳で区切りをつけるか。それとも75歳。後期高齢者になるまで続けるか。でも、妻にしてみれば、そこまでやんなくてもいいんじゃないのと。老後をゆっくり過ごすのもいいんじゃないのと。正直、揺れてますね」

そう言いながらも「体さえ大丈夫だったら、私としては何歳までやってもいいんです。資金がどうこうじゃなくて、体が資本」と生涯現役の勢いの塩田さんであるけれど、ふと思う。書店員の仕事って、肉体労働ですよ。毎朝、段ボールいっぱいの本が届いて、そこから棚を整理して、返本を段ボールに詰め込む。本は重い。右から左へ移動するだけでもたいへんだ。年を取れば、やっぱりしんどい？

「なにを言ってるの。そんなことは苦にならない。日常だし、仕事。それよりも、並べた本がぜんぜん売れないこと。幾つになっても、苦しいのはそこだよ」

話は変わるけど、そうやって塩田さんは「気がつけば、書店の数よりもセブン-イレブンの店舗数の方が多くなってんだよなあ」。そう。気がつけば、である。誰もがコンビニで当たり前のように本を買うようになった。ネットでも簡単に本を求めるようになった。書店で本を買わないことを、そりゃそうですよと塩田さんは考える。

「書店で注文するよりも早く本が届くんだから、田舎の人たちはアマゾンで買いますよ。でもね、嫌だなあって思うことがあるんです。ネットは新しい本も古い本も一緒に並べるでしょ。あれが嫌。新刊には新刊の良さがあって、古本には古本の良さがあるんだけど、ネットだと古本じゃなくて中古品だもん。リサイクルショップで本を扱うというのは、私は好きじゃない」(続く)

※「余市の人々。」は、余市町戦略推進マネージャーの江部拓弥（えべたくや）さんが、余市町に関わりのある人物へのインタビューをもとに執筆し、「WEB本の雑誌。」(<https://www.webdoku.jp/column/ebe/>)に掲載されているものを、転載しております。※掲載日 2020.8.31

問合せ 企画政策課 企画グループ ☎21-2117

## 色とデザイン力で、観光協会の活動を支援 ～新しい地域おこし協力隊をご紹介します～

こんにちは。10月1日に町から地域おこし協力隊の委嘱を受け、東京より移住しました「田口りえ」です。出身は旭川市ですが、伯父が余市町内で果樹園を営んでいたため、幼いころから長期の休暇は登地区で過ごしていました。リンゴの木にのぼったり、セミの抜け殻を集めたりと、余市での思い出はいつも心の中の温かい場所にあります。

進学や仕事、家族の縁で全国に生活の場を移してきましたが、いつかは北海道に帰りたくと願っていました。このほど「地域おこし協力隊 観光協会支援員」という形で、それを実現する一歩を踏み出したことを嬉しく思っています。

観光協会での主な仕事は、カラーコンサルティングやデザインの仕事の経験を活かして、ECサイト(※)の運営支援を手がけます。ロードバイクが趣味ですので、サイクルツーリズムなども開催したいと考えています。町内を走っている姿を見たら、ぜひ気軽にお声がけください！

(※) ECサイトとは、インターネットを使った販売サイトのこと。

(聞き手：地域おこし協力隊広報支援員 本間朋子)

